

犯罪からの子どもの安全 関与者インタビュー

地域の人々の 「計画的な防犯まちづくり」を支援

子どもたちが通う小学校周辺の環境が、今、大きく変化している…。千葉県市川市の稲荷木(とうかぎ)小学校周辺地区では、子どもたちの通学区を縦断するように東京外かく環状道路(外環道路)の用地買収が進められています。すでに小学校の周辺は道路用地の空き地や暗がり



が広がっており、子どもに対する犯罪の不安が高まっています。また、外環道路開通後は人の目が届きにくい緑地や長い歩道橋が計画されており、犯罪からの安全性の確保が課題となっています。そのため、将来のまちの姿を見据えながら、地域の人々が協力して犯罪の起こりにくい安全で安心なまちづくりを進めていくことが求められています。そうした稲荷木地区の人々の取組みを支援しながら研究開発を進めているのが、JST社会技術研究開発事業採択研究開発プロジェクト「計画的な防犯まちづくりの支援システムの構築」(代表者:山本俊哉 明治大学理工学部 教授、以下、山本プロジェクト)。まちの将来の姿と対策をみんなで考えようと、地域の人々と協働して3回のワークショップを企画。今回は、その第1回ワークショップと、参加者の防犯まちづくりに対する想いを紹介します。

第1回防犯まちづくりワークショップ「将来のまちを防犯診断しよう!」

目的: 外環道路整備後のまちの姿と課題の共有
 新たにつくられる公共空間(道路、緑地、歩道橋)の問題点と対策は?
日時: 平成21年11月11日(水)13:00~16:00
会場: 市川市立稲荷木小学校ランチルーム
参加者: 市川市立稲荷木小学校PTA役員、市川市稲荷木自治会会員、市川市役所の担当者、
 山本プロジェクト実施者など約30名
 (市川市稲荷木小学校周辺地区 子ども安全ホームページ: <http://toukagi.jp/>)

「まちの将来の姿」を見据え、関係者が協働して対策を練る

稲荷木小学校周辺地区が市川市の「防犯まちづくりモデル地区」に選定されたのは、平成19年度のこと。市川市は、東京のベッドタウンとして発展した人口約50万人の都市で、最近では安全・安心なまちづくりに取り組む先進的な地域としても知られています。市では平成16年度より、小学校区を単位とした地域の関係者の協働による「計画的な防犯まちづくり」を促進するモデル事業を実施してきました。現在、4地区が選定されていますが、この事業の特徴は、PTAや自治会等の関係団体の代表者と市や警察の担当者が集まって「防犯まちづくり委員会」を立ち上げ、その地区の「防犯まちづくり計画」を作成し、防犯活動とまちづくりを計画的に進めるというもの。

4番目のモデル地区に選定された稲荷木地区では、4つの自治会、商店会、小学校・PTA、幼稚園の各代表者と、市川警察署・市川市役所の各担当者が集まって平成19年12月に防犯まちづくり検討委員会を立ち上げ、地区の現状や課題を約1年間にわたり調査・検討し、平成21年2月に防犯まちづくり計画をまとめました。その計画には、地区の現状や防犯活動の取組み状況、課題を踏まえ、防犯まちづくりの考え方や新たな提案、計画の実行に向けて取り組むべきことが盛り込まれています。これを読むと、子どもにとって安全なまちとはどんなまちで、どの団体が何を取り組むのかなどが分かります。

まちづくりで大切なのは、そこで生活する人々が地域の将来の姿を見据えて活動すること、そして適切に関係者が協力することですが、関係者が共通のイメージや目標に向かって連携することは難しいのが現状です。これらを踏まえて、計画的に地域の人々が防犯まちづくりを進めるためのマニュアルや、情報発信・共有のためのポータルサイトの開発に取り組んでいるのが山本プロジェクト。同プロジェクトでは、実際に防犯まちづくりに取り組む複数の地域を支援しながら研究開発に取り組んでいますが、稲荷木地区もその1つ。代表者は、市川市の最初のモデル地区の計画作成にも関与してきました。山本プロジェクトが防犯まちづくりで大切と考えているのが、計画(Plan)を立てて、実行(Do)した結果を、点検(Check)し、見直す(Act)というPDCAサイクルを取り入れることです。ただ計画を作成すればよいのではなく、実行・点検して、必要に応じて計画を見直すことで、まちの変化にも応じて継続的に防犯まちづくりを進めていくことができます。

稲荷木地区の取組みをこのPDCAサイクルになぞらえると、防犯活動については計画(Plan)をまとめ、実行(Do)の段階に入っていますが、外環道路の整備に伴い大きくまちが変わることから、将来的には外環道路に係る計画について点検(Check)して見直す(Act)という取組みも場合によっては必要とされています。平成21年2月にまとめた防犯まちづくり計画では、そこまで十分に検討しきれませんでした。ハード面の整備は予算を伴うことから行政関係者と検討を重ねる必要があります。そこで、防犯まちづくり委員会は、専門家の協力を得て引き続き検討を続け、計画を見直すとともに、国や県を含む関係行政機関にその実現に向けた協力を要請していくことにしました。

今回、防犯まちづくり委員会と山本プロジェクトのグループが企画した全3回のワークショップでは、計画を着実に実行・継続しようと、地域に住む人たちが「まちの将来の姿」を考えることを共通テーマにしました。1回目の今回は、外環道路整備後のまちを防犯診断して、問題になる場所を点検し、対応のあり方などの検討を行いました。第2回では、子どもたちや高齢者が安全で安心に歩ける歩行空間の確保を課題とし、第3回は、防犯の視点から見た住宅地のあり方について話し合う予定です。

市街地模型を使った“イメージまちあるき”で、将来のまちを防犯診断する

今回のワークショップには、PTAや地元自治会などから30名ほどの参加者が集まりました。

稲荷木地区は、平成27年に外環道路の開通が予定され、この道路整備に伴い、まちの3分の1が道路や緑地に変わります。外環道路については長年に渡って話されてきたことですが、実際に完成した場合、どのような姿になるのか、地図をみただけではなかなかイメージが付きません。そこで用意されたのが稲荷木地区の外環道路整備後の市街地模型です。



グループワークでは、それぞれのテーブルでときには笑いが起こり、和やかな雰囲気が見られた

模型を使うことにより、計画図や完成予想図では捉えきれない姿、例えば外環道路の整備によって新たにつくられる道路や歩道橋が立体的にどのようにつながり、防犯上問題となる場所がどこにどのように現れるかが一目でわかります。そこで、“イメージまちあるき”と称して、外環道路整備後の姿を先取りした千分の1の模型のまちを歩きながら防犯診断を行いました。犯罪の危険が潜む箇所を点検し、今からでも対応可能な方法を検討して、なんとなく抱えている将来に対する無用な不安を解消していくのが狙いです。

今回のワークショップは、参加者が5つのグループに分かれて議論し、発表後にまとめを行うという流れで進行。山本プロジェクトの実施者が、全体の司会や各グループのファシリテーターとなり、地域の人々の議論をサポートする形です。グループワークでは、将来の市街地に潜む問題や今後の対応のあり方について話し合いました。

最初に各グループで地図に参加者の自宅をチェック。学校や公園など子どもがよく行く場所にも目印を付け、外環道路ができれば目的地までの経路を使って行くようになるのかを確認しました。会場となったランチルームの中央に市街地模型を置き、その周りを囲むように各グループのテーブルを配置したことで、必要な時は模型で確認できるように工夫。外環道路の立体交差や歩道橋がどうなるか、具体的に把握できた様子でした。「ここは通学路だけど灯りがなく、夜子どもが歩くのは心配」という地図だけでは読み取れない地域住民ならではの意見や、「私の家の前にできる緑地は花が絶えないよう、私も手入れに参加したい」など、自分たちのまちを良くしていきたいという意気込みが感じられる提案も出されました。

外環道路が開通したら、安全になるところ、危険になるところ、不明なところの点検も行いました。昨年度にまち歩きをして作成した安全点検マップも参考にしながら、外環道路の計画図に書き込んで検討。以前から外環道路の計画は知っていても、「外環道路との距離間が実感できる」「模型をレーザーポインターで照らすと、どこが死角になるかわかる」といった模型を使ったからこそ出てきた意見や、小学校のすぐ裏に外環道路ができることに改めて驚くグループがあるなど、立体的な視点で考えることの有効性が認識できた瞬間でした。

幅60mの外環道路を渡る際、信号を待つ時間が今までより長くなるのではないかと。自転車ではどうやって歩道橋を通行するのか。雨が降った時を想定すると、歩道橋には屋根や風よけがあるのか。子どもたちのことを考え、そして自分自身の問題として、参加者全員が積極的に意見を出し合いました。模型と地域住民の身近な意見の相乗効果で、グループワークは盛り上がりを見せました。



手作りした立体的な市街地模型を使い自宅や通学路などを“イメージまちあるき”

グループワーク後の発表は、代表者やファシリテーターがまとめて発表するグループもあれば、全員一言ずつ話をするグループもあり、そのスタイルは様々。発表内容は各グループに共通するものが多くありました。主なテーマとなっていた外環道路周囲の緑地についても、「単調な景観にならないよう、花が咲くような木を植えてほしい」「死角を増やさないう、中途半端な高さの中木は避けた方がよい」など、有用な意見が多数出され、地域の住民はもとより、行政機関からの参加者もメモをとりながら熱心に聞き入っていました。このように、全員が自分たちのまちについて当事者意識を持って議論し合えたのは、立体模型というわかりやすいツールを上手く活用しながらワークショップを進めた防犯まちづくり委員会と山本プロジェクトの協働があったからと言えるでしょう。最後にプロジェクト実施者から、今回のワークショップの成果と、今後の活動についての説明があり、閉幕となりました。

今回のワークショップの企画者で稲荷木小学校周辺地区防犯まちづくり委員長でもある滝沢晶次さんに、地域住民を代表して、今回の試みや防犯まちづくりへの想いについてお話を伺いました。また、モデル事業や道路整備を担当する市川市役所の方々にも伺いました。

生まれ育った安全なまちを、次の世代に残していきたい

滝沢 晶次 市川市稲荷木自治会 会長・稲荷木小学校周辺地区防犯まちづくり委員会 委員長

今回は、大勢の方がワークショップに集まってくださり本当に嬉しかったです。皆さんのさまざまな意見に、感心しながら耳を傾けていました。稲荷木地区の防犯まちづくりは、「人々の交流・コミュニティが次世代へと続いていくやさしさと緑あふれるまち」を合言葉にしています。住めば都と言いますが、私だけでなく皆さんがまちを愛していることと思います。

今後、外環道路が開通してから、どういった防犯まちづくりをしていくのか。地域全体でコミュニケーションを活発に行いながら考えなくてはなりません。環境づくりは地域で取り組むこと。住民同士のコミュニケーションは、犯罪を未然に防ぐこともつながるのではないのでしょうか。たくさんの人と手と手を取り合って、みんなで防犯まちづくりの意識を高めていけたらと考えています。今までにもパトロールなどの防犯活動を実施してきましたが、一部の限られた人だけが活発に動くだけになってしまったり、時が経つにつれマンネリ化して徐々に協力者が減少したりと、防犯対策の機能を失っていました。自治会長の交代によって活動の内容や積極性が変動し、継続的な防犯対策がなされていないこともありました。また、同じ地域の安全を考えるはずなのに、自治会やPTAなどの各団体で活動が独立してお互いに連携する体制がとられていないことも少なからずありました。

平成21年からは山本プロジェクトの方たちの支援を得て、地域が一丸となって「防犯まちづくり計画」を着実に実行しています。プロジェクトの支援によって「市川市稲荷木小学校周辺地区子ども安全ホームページ」という地域ポータルサイトが開設し、計画内容や取組みを広く情報発信しています。住民や行政機関などあらゆる人が防犯についての情報を手軽に入手できるようになり、防犯に対する意識の向上の一助となっています。

今、さまざまな専門家の観点を含めて地域の防犯上の不安を調査し、改めて地域の防犯対策について検討しています。プロジェクトの方々に今回の模型を使ったワークショップを企画してもらい、地図や模型を使って具体的に考えていくことで、将来の防犯対策についてはっきりとイメージすることができました。これからも専門家の方からも知識や提案を受け、防犯まちづくりを実現していきたいと思えます。

防犯まちづくりは、地域が主体となって住民一人ひとりに自主的に動いてもらわなくては成り立たないものです。強制しては、参加者の負担が重くなって長続きしなくなってしまいます。



山本プロジェクトとの協働で、全員参加の継続的な活動が可能になった（写真中央 滝沢さん）

今回のワークショップのように、みんなで集まる機会を定期的につくって、コミュニケーションを深められるようにしたいですね。防犯とまちづくりを融合させていくことで、自治会やPTAなどの団体と行政機関が連携し、広がりのある活動が実現できます。そのうえ、役割分担をすることでそれぞれの負担が軽減され、自主的に行う意識が根付き、長期的な活動をすることが可能になるのではないのでしょうか。

外環道路と言うと実生活に関わるため、住民の誰もが関心を持ちます。防犯まちづくりにとってありがたいチャンスです。これを機会に、世代に関係なく、自分が住むまちの安全について考えてみてほしい。若い世代の人たちも加えて、さらに幅広い意見を取り入れたいと思います。みんなと一緒に語り合い、気軽に防犯活動に参加できるような雰囲気づくりも心掛けていこうと考えています。

安全という横軸を基調に、地域全体による防犯活動を

眞子 秀輔 市川市危機管理部防犯担当 担当マネージャー

今回のワークショップでは、地図や模型を用いて、どのようにまちが変わっていくのかを考えることで、新たな発見がたくさんあり、住民の視点により近づくことができました。市役所だけで、市全体の防犯を行うことは物理的に厳しい。住民からの協力があってこそ、なのです。かつては自治会、PTAなど複数の団体が、それぞれに防犯活動をしていましたが、外環道路をきっかけに同じテーブルにつくことができました。これからもお互いに連携を深め、防犯活動を続けていきたいですね。

※取材者の所属・肩書はインタビュー時のものです

外環道路が結ぶ、地域の“安全第一”のつながり

及川 和弘 市川市危機管理部防犯担当

市街地模型を見て、外環道路の建設により街の変化が確認できました。これを新たなまちづくりの転機と捉え、一緒に防犯活動をしていくことで、地域住民の皆さんに一体感が芽生えるのではないのでしょうか。市でも、地域の安全を第一に考えながら、皆さんと結束して防犯対策を行っていこうと思っています。

外環道路事業に関する市の窓口です

竹林 英介 市川市街づくり部外環道路推進課 主査

私は、外環道路事業に関する市の窓口を担当しています。ワークショップに参加して、皆さんの率直な意見を聞くことができました。この場で話し合われた数々の貴重な意見を、市のまちづくり役立てたいと思います。できるかぎり、市民の大切な想いをくむことが私たちのミッションだと思っていますので、これからも地域の方たちと一緒に、防犯まちづくりを考えていきます。



ワークショップへの参加で、地域の皆さんの具体的な意見を伺うことができた

取材を終えて

外環道路計画をきっかけに、稲荷木地区の皆さんと山本プロジェクトの実施者たちが協働し、新しいまちづくりに取り組んでいる。山本プロジェクトは、具体的で、わかりやすい手法を提案しており、地域住民がそれらを取り入れながら生き生きと活発に活動している。まさに協働の本質を見せていただいた。